

もくじ B 29 搭乗員の墜落死について 1P
 千住の百万遍 (前) 2P 企画展 谷文晁の印章と印譜 4P

足立史談

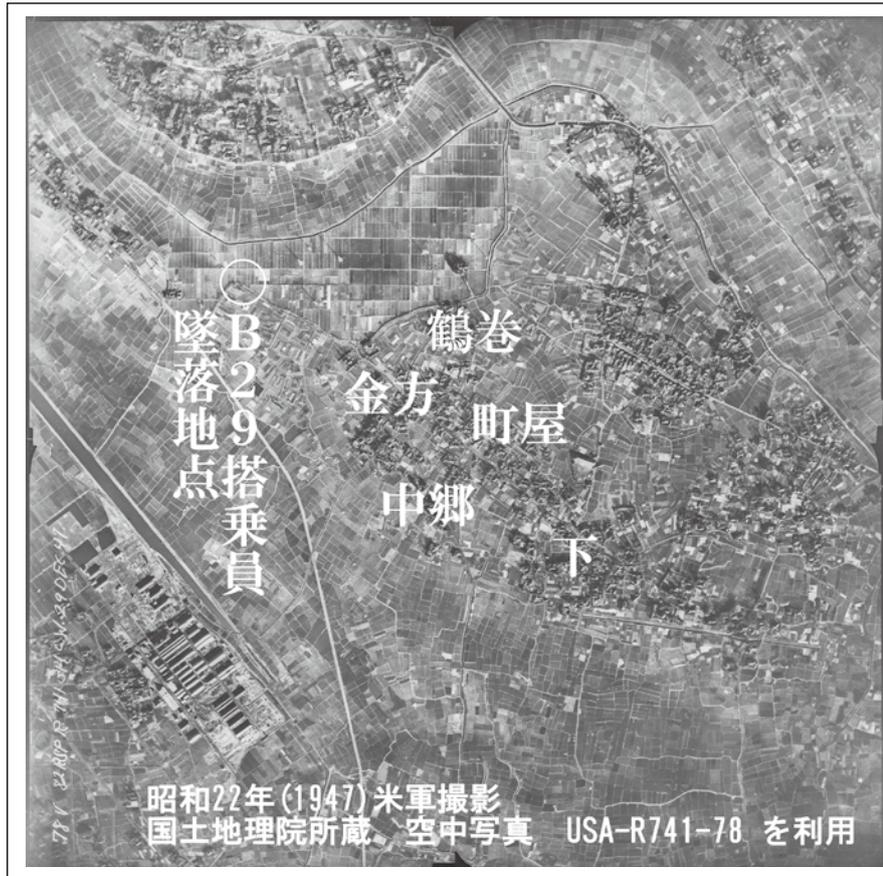
第601号

2018年3月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (29-308)

B29搭乗員の墜落死について

薊 照夫



太平洋戦争末期のアメリカ軍による空襲のおり、高射砲などで撃墜され、足立区に墜落したB29という爆撃機がありました。いま、その遺品が郷土博物館でも展示されています。展示の背景となった調査は、今から二十三年前の調査結果です。区内に落ちたB29は三機とされ①入谷町、②花畑町(現北加平町)、③荒川河川敷の三つとなっています。地元でこのB29のことをお話いただく機会があり、調べてみると、この三機のほかに別のB29の搭乗員の墜落死のことが見えてきました。

体験談を話してくださったのは昭和十四(一九三九)年生まれの入谷の福田勝平さんです。勝平さんのお父さんは明治四十三(一九一〇)年生まれの平右衛門さん(故人)で、福田家の屋号は鷹番(たかばん)でした。去る平成二十八(二〇一六)年五月十四日に聞き取り調査を行いました。

福田さんのお話をここに紹介します。
 * * *
 当時、私が六歳の時に覚えていること、父や家の人、近所の故・斎藤よしさん(おけやさん)の話から思い出してみました。昭和二十(一九四五)年三月十日の早朝のこと※1、近所の人や畑の野廻りの途中、入谷の砂原耕地※2の畑に人が

倒れているのを見つけました。この人が近所の人に話し、誰かが下(しも)※3の駐在所のおまわりさんと呼びに行きました。その時のおまわりさんは三松さんだと思えます。この場所は自宅の畑で、小松菜がまだ3cm位しか伸びていなかったのを覚えていました。

倒れていたのはアメリカ兵でした。パラシュートが開かない状態で落ちた衝撃でしょうか。畑にくぼんだ跡がありました。落ちた時にはまだ生きていたのか、苦しんだことを思わせるように、周りの泥をかきむしった跡がありました。

駐在さんの指示だと思えますが、金方ズシ※4の組合の人々でその場に埋め、墓標も塔婆も建てなかったそうです。

終戦後、復員した父(平右衛門)が、家にあつたざくろの木を、遺体を埋めた場所の周りに植えました。線香等々を上げ、お参り出来るようにしました。その後は、お参りや供養などはしなかったといっています。

翌年(昭和二十一・一九四六年)、ざくろの木に花が咲いた頃だから六月か七月頃と思われるが、日本の警察とアメリカのMPが何台かのジープでやってきました。

父が、埋葬した場所に案内し、掘り起こしていきました。後で聞いた話ですが、丁寧な埋葬状態であった

ので、アメリカ軍が感激していたそうです。そして、お礼に缶入りの粉ココア、コーヒール、肉とジャガイモの入った缶詰を箱ごと置いていきました。すごくうまくいったのを覚えています。

その後は、何の連絡も無く、また畑もそのまま元に戻して耕作しました。

戦争中とはいえ人の死を見て、戦争は二度とあってはいけないと思いました。

※1 後掲の記録から三月十日、いわゆる東京大空襲の当日。

※2 入谷の地字名の一つ。現在の入谷九丁目周辺。

※3 入谷のズシの一つ。ズシとは組とも称される地縁集団で現在の町会に近い。現在の入谷三丁目の一部と四丁目周辺。

※4 入谷のズシの一つ。入谷四・五丁目あたり。東武バスのバス停に金方の名称がある。

* * *

アメリカ兵が墜落した場所は、当時、近くに第六天の小祠がある福田家所有の入谷町一六九六番地で、約四畝の畑だったところです。

撃墜されたB29については青森空襲を記録する会作成のHP「本土空襲墜落機調査」、HP「POW研究会」ほかを参照すると詳細を見

ることができません。#(ナンバー)42163596、ニックネームは「ZERO AUER」といいます。所属は第二〇航空軍第三一四爆撃団第二八爆撃隊に所属した一機です。現在の川口市芝川公園周辺に昭和二〇年三月十日の午前一時ごろ、攻撃をうけて分解して墜落し、搭乗員十一名は死亡したと記録されています。

福田さんのお話は、当時のようすを今に伝える貴重なお話です。戦時の異常事態に、敵軍であっても感情にはしることなく、丁寧に埋葬したことは村の人々の心意気と誇りであると思います。

この事件については、昭和四十年代の調べで確認しています。地域の情報が入谷の金方・鶴巻に限定しているため、舎人地域(現入谷、舎人、古千谷と周辺)に行きわたっていません。本件のあと、昭和二十年五月二十六日に、現在の流通センター付近に墜落したB29のことに関心が集まってしまったため、記憶に乏しくなっています。

舎人小学校百年記念誌の座談会では、斉藤庄蔵さんだけがこの入谷で墜落した事件に触れています。「川口のオートレース場近くに(B29が)落ちた時には、アメリカの兵隊が落下傘で降りてきたんだよね。ところが低かったため、落下傘が少し出たが開く余地がなく、

入谷の福田勝平さんの畑へおっこちて、落ちたところは土が少しくぼんでうつぶせの状態で、背中に落下傘が見えていました。」

平成十八年頃、岩手県の学校教師がこの事件のため福田さんの自宅に訪問されたとのことでした。私は不在でした。内容は、米軍人遺体を発見した女性が薊直右衛門(私の祖父)

千住の百万遍(前)

永野家資料から

萩原 ちとせ

■百万遍念仏とは 百万遍念仏は、念仏を百万回唱えることによつて、故人の成仏や無病息災を祈るもので、一〇八〇顆ある大きな数珠を、人々が輪になつて練りながら唱えるものである。「百万遍」と念仏を省略してよばれることも多い。また、百万遍念仏を行う仲間を指して百万遍念仏講、講中とよぶ。

現在、区内で見ることができるのは鹿浜の押部地域に伝わる阿弥陀院の百万遍であるが、かつては、区内各地で行われており、鹿浜の百万遍念仏では平成6年を最後として、博物館に道具を寄贈された。

百万遍念仏が行われていたのは、ほとんどが戦前までであり、すでに、

に連絡、祖父が交番に通報・案内したとの情報です。

(足立史談会役員)

協力:「右手・戦争を記録する会」

事務局長 加藤昭雄

参考:「東京大空襲の夜 B29墜

落の謎と東北空襲」昭和二十

年 加藤昭雄

どのように行われていたかという話もうかがうことはできない。百万遍念仏で特徴的なものは、講員が輪になつて練るための大数珠と、念仏を唱えた回数を数える数取りの道具や鉦で、こうした道具が地元に残されていることによつて、かつて百万遍念仏が行われていたことがうかがえるのである。

区内の百万遍念仏は、ズシとよばれる近世村のなかを分けるグループを単位として行われる。春から初夏の間の年に一度、ズシの家々を回り、家ごとに念仏をして、その効力によつて災厄を除け無病息災を祈ることと、葬式や初七日、四十九日などの葬送儀礼の際に、その家に集まり死者の極楽往生を祈ることがおこな活動の目的である。

■千住の念仏講中大帳 博物館解説ボランティア博友会の古文書学習において、千住二丁目の名主永野家文

書から「元禄八 乙亥年七月 念仏講中大帳 千住宿式丁目」（以下念仏講中大帳）という二十四丁の冊文書を取り上げて講読した。この古文書の内容を紹介し、現在は伝承のない千住の百万遍念仏について考える。

まずこの「念仏講中大帳」は以下のような順番と内容となっている。

- (一) 目録（念仏講中結成の理由と道具の書き上げ、連名があることなどを述べたもの。大帳の内容）
- (二) 短歌
- (三) 百万遍念仏そのものの由来と、当町での始まりの経緯
- (四) 講中活動の決まりや経緯、この大帳作成の理由
- (五) 講中持ちの道具の書き上げ
- (六) 歴代世話人の記録

(四)の部分の終には、年月が経ち帳面が大きく破損してしまい文字な

どがわからなくなったため、今回新しく帳面を整え、以前から伝えている文面をそのまま写し、後の人に伝えたく永野政重が再興したものであるとの趣旨が書かれている。そして、嘉永四（一八五二）年の八月という紀年と、永野政重の署名がある。

このことから、「念仏大帳」の作られたのは嘉永四年であるが、もとなる帳面があると説明している中で、表題にある元禄八（二六九五）年は、このもとの帳面の記載を表しているであろう。（後述）

■目録と短歌 (二)の短歌は、目錄のすぐ裏頁にあり、「一日につくりしつみは ちりほこり 南無阿弥陀仏は はうきなりけり」と記されている。知らないうちに日々

作っている罪は、塵や埃のように積もっている、南無阿弥陀仏と念仏することは、それを払う箒のような功德があるとされる。この短歌は、初めの五句が「一日に」ではなく、元々は「日々に」で、現在でも浄土宗の寺院では、念仏の功德を表す短歌として使われており、江戸時代には知られていた短歌である。

この頁は、念仏大帳の扉頁のような役割を果たし、この大帳の目的である百万遍念仏講の記録という事務的な事柄と、今後の永続を願う気持ち、短歌という文学的なものでもとめ、装飾しているといえる。

■百万遍の歴史と功德 (三)では、そもそも百万遍念仏の歴史とその効力が書かれている。

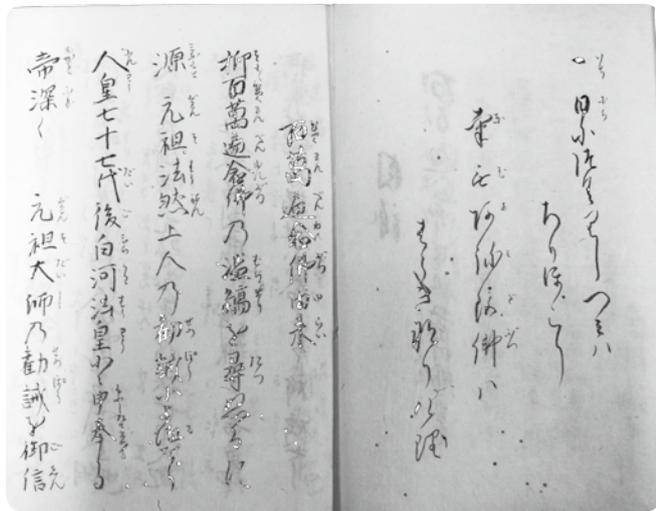
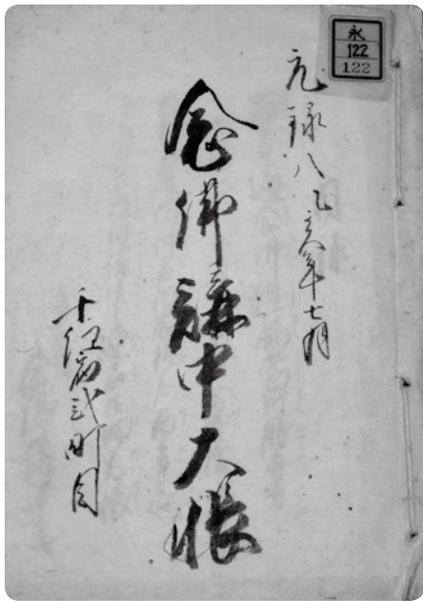
まず、後白河法皇が元祖大師（法然のこ）の説法を信仰し、百万遍念仏の修法をしたのが最初であり、その後、後醍醐天皇の、元弘元（一三三二）年に大地震と疫病の流行した際に、法然上人が一七日（いつしちにち）の間百万遍の念仏をしたことよってこれが治まり、天皇は、弘法

え、百万遍知恩寺と名付けたこと、近年では、御当家御先祖親忠公のとき、三州飯田野の合戦の際、百万遍念仏によって討ち死にした亡霊が徳脱（生死の苦界から抜けて菩提に向かうこと）したといわれていること、東照神君家康公が武田信玄と合戦に勝ったのも百万遍念仏の力であるといわれていることが挙げられている。

ここで書かれている、百万遍知恩寺は、京都市にある浄土宗大本山の歴史に関することである。後醍醐天皇の勅命による七日七夜の百万遍念仏を行うことよって疫病を鎮めたことよって百万遍の寺号が下賜されたという寺の歴史と符合するが、法然上人はすでに、建暦二（一一二二）年と百年以上前に亡くなっており、知恩寺も、その恩徳を偲んで建てられた寺であるため、話に混同が見られる。

また、「御当家御先祖親忠公」とは、將軍家の先祖である松平親忠を指し、「三州飯田野の合戦」とは、応仁元年（一四六七）に起きた井田野合戦のことを指している。松平信光と親忠が、尾張の品野・三河の伊保の兵と井田野（愛知県岡崎市）で戦い勝利したもので、のちに、親忠は戦死者を埋葬して塚を築いて弔い、念仏堂を建てたと伝えられている。

現在、この塚は千人塚とよばれ、



塚の上に建てられていた碑には、次のように刻まれている。

碑銘「南無阿彌陀佛」

左側面「井田塾戦七精靈金臺」
右側面「元禄九丙子年八月五日大樹寺廿八世忍譽碑銘焉」

その他小さな碑や墓が二十基程建ち並び市指定史蹟となっている。

家康が信玄との戦いに勝ったというのは何を示しているのか不明である。家康と信玄が直接対決したのは、元龜三(一五七二)年に家康が敗退した三方ヶ原の戦いと、その翌年の野田城の戦いで、このとき信玄は、徳川軍と野田城で戦い中に、狙撃されたのをもとに死亡したという異説が生まれたという。現在では伝えられていないが、ここに、何か念仏の効力にまつわる話が流布していたのかもしれない。

■権威による功德の増幅 (二)ここで、興味深いのが、念仏の功德を徳川家の逸話にからめて説明していることある。そして、表記を「御当家親忠公」「東照神君家康公」と、徳川家に関わる人物には尊称を用いているのに対して、その敵であった「竹田信玄」は呼び捨てなど、江戸の周縁であり、さらに直轄領であった千住の住民として、徳川家の権威を強く意識し、その権威と自分たちとの同化を感じさせることがうかがえる。

もちろん、念仏の功德、身近で権威ある徳川家の逸話にからめることで、さらにその功德を増幅させ有益なものとして説明する有効な手立てとしていたのである。

岡崎市の千人塚の碑は、元禄九年の建立となっており、千住の念仏大帳の成立も、元禄八年とする。まだ多くの検証が必要であるが、念仏講の石碑や資料など、元禄期とするものが多い。社会が安定してきたこの時代に、各地で念仏講が盛んになったことや、浄土宗が布教に力を入れ、それが契機となつていふことも考えられる。

■千住の百万遍 (三)の後半からは、千住での百万遍念仏の発祥が説明されている。

寛文四(一六六四)十月、各地修業中の祐天大僧正が勝専寺に逗留し、寺の由緒をすべて聞いて、十月六日から十五日までの十日間百万遍念仏の法要を執り行い御説法、御導師を務めた。この有難い事柄に人々が大勢集まり、住寺の専譽上人も大変感動し、大数珠を調整して百万遍の修法を行った。延享年間(一七四四～一七四八)まで、毎年五月五日に町内安全のため、大数珠を持って家ごとに百万遍念仏を行い、毎年十月六日から十五日まで祐天上人の書いた大幅の名号の軸を掛け、十夜法要を今に至るまで続けて行い、大勢の

人々が集まる法要となつているとする。そして、これは、百万遍念仏の利益をだれでも分かりやすく略したものであるため、詳しくは関連する書物を見るように、とまとめられている。

この説明に従うと祐天上人(一六三七～一七一八)は、二十八歳にあたる年に、千住二丁目の勝専寺に逗留したことになる。祐天上人が大僧正になるのは正徳十一年(一七一二)の七十五歳のときであり、また、「延享年間」という記述

もあるため、すべての記載が、表題の元禄八年(一六九五)年に完成していたのではないことがわかる。(以下次号)

(当館学芸員)

(引用) to KAZUSA「井田野古戦場」千人塚」

(<http://kazusa.jp.n.org/b/archives/4457>・2月28日)

◆企画展 谷文晁と二人の文一展

谷文晁の印章と印譜

郷土博物館

三月六日～五月十三日

展示会の一つの柱が昨年江北の船津家で確認された谷家の印章三つです。

同家美術資料(当館寄託)には印譜二冊と文晁門人船津文淵が縮図帳に収めた印譜の三点があります。いずれも実際に印章を用い、伝来経緯も明らかで収載の印章をすべて図録に掲載し展示会でも掲示しています。

あわせて印文を解説しています。中には「日々新又日新」(一日一日新たな気持ちで迎える)や、「意在筆墨外」(芸術の根源は作者の心にある)といった言葉への心得や「谷文晁住江戸下谷二丁町三味線堀上」と具体的な住所地を記した文人絵師たちの考え方が伝わってきます。

